Japanese Association for Religious Studies

なり、すべての願いが成就するとある。このように、伊勢神道や吉田神道の祓の思想には、恒例の大祓に窺える呪術的宗教性をもとにしながら、個人祈願に応えるといった「現世利益」のみならず、神や天地万物と合一するという究極的な「救済」への道筋が示されている。そして、その救済観を支える神道思想の世界観には生命主義的要素が多分に含まれていた。

しかし、古学神道家によって、それまでの中臣祓の解釈が否定され、律令祭祀で用いられた大祓詞の解釈が行われるようになると、中臣祓本文中に清浄に関する偈が内包されているといった二重構造は否定され、禊祓も心を祓い清めるものではなく、身の穢れを清めるわざであるといった解釈がなされるようになる。その一方で、大祓詞と共に用いられたと考えられた「天津祝詞乃太祝詞」の復元が試みられるという新たな思想的潮流も生み出されていった。このように、伊勢神道や吉田神道の祓の思想に窺えた生命主義的要素や救済観が後退する中で、新たな生命主義的世界観や救済観が模索されることになるが、その過渡期に信仰を形成した一人が金光大神であったと考えられる。

弘道館とその祭神
――会沢神学の構造――

桐原健真

本発表は、後期水戸学の大成者として知られる会沢正志斎（一七八二〈天明二〉―一八六三〈文久三〉年）が、一八四一（天保一二）年に創立された藩校・弘道館における祭神選定問題にいかに関与したかを検討することを通して、「神儒一致」を標榜していた水戸学におけるイデオロギーとしての神道の位相を明らかにすることを目的とするものである。

弘道館には儒学の伝統として孔子が奉斎されている（ただし孔子廟は一八五七〈安政四〉年建立）。そして神儒一致の立場から、このほかに日本の神も祀られている。それが鹿島神・タケミカヅチである。弘道館に奉斎すべき神として適当な存在は、ほかにも存在したはずであった。たとえば、会沢は、一八五八（安政五）年に、水戸藩の西方に位置する笠間藩が設けた藩校の時習館のためにその館記を草しており、その中で次のように記している。

国の中央を卜し、文武の館を合せ、以て子弟の学習に便ならしむ。時習の名は旧に仍るも、而して宇倍神〔武内宿禰〕と孔子の神とを合せ祀る。宇倍神は我が祖先の仍を自りて出づる所にして、神后の西韓を征し、天威を海外に揚ぐるを佐く。（「時習館記〈安政戊午、代笠間侯〉」、『会沢正志斎文稿』国書刊行会、二〇〇二年、一四〇頁）

すなわち笠間藩で孔子とともに祀られているのは、藩主の祖先神としての宇倍神であって、会沢もまたこれを高く評価しているのである。すなわちそれは神功の親征を佐けた（忠）祖先神の偉業を称える（孝）という忠孝一致のイデオロギーの具現化であったに違いない。このように考えると、水戸徳川家の藩校である弘道館に祀るべき神とは、やはりその祖先神あるいは東照

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

大権現としての徳川家康であったはずである。しかしこれらの神は、祭神選定過程において一切その名前を見ることが出来ない。もとより家康を奉斎するためには様々な政治的困難が伴っており、またすでに水戸城下には東照宮が存在していたことも関係しているであろう。

しかし、たとえ家康奉斎が叶わなくとも、水戸徳川家には藩祖・徳川頼房以来崇敬する日本武尊（吉田神社）が存在していた。本来、この神への崇敬は、頼房入封以前に常陸国を領有していた佐竹氏による八幡神崇敬に対抗すべく選択された藩レベルでの新たな国家神であった。だがこの神もまた、弘道館に奉斎すべき神の候補とすらされなかった。

弘道館建設に全力を注いだ藩主・徳川斉昭は、はじめ「神武帝・応神帝・天智帝」といった天皇神の奉斎を構想する。彼は、天皇神を中心として、孔子やその他の日本の神を配置することで、尊王の実をあげようと考えていたのである。しかし、この目論見は、会沢を始めとする彼の側近らによって潰えてしまう。彼らは、臣下が天皇神を奉斎することの不敬を指摘し、みずからの主君にその計画撤回を訴えたのである。

天皇神奉斎という原案に代わって最終的に選択されたのが、鹿島神であった。会沢の理解では、天孫のために常陸国を拠点として蝦夷を平定したこの神こそ、「尊王」と「攘夷」とを象徴する神にほかならなかった。そして、本来、水戸藩領に含まれていないこの常陸国一宮・鹿島神宮の神を水戸藩の神として祀ることで、会沢やその同志たちは、御三家の中で唯一一国領主ではないこの水戸徳川家を「常陸国領主」へと（観念の上だけではあるが）転身させることができたのである。また、この「尊王攘夷」の神を奉斎することは、みずからもまた「尊王攘夷」という神聖なる使命を帯びることを意味したのであり、そのためにも斉昭を中心とする水戸藩の天保改革は、いっそう力強く推進されなければならないという政治的主張へと逢着することとなる。それはたんなるノッペリとした国民国家論などには回収されることのない「水戸」という土地に根差したイデオロギーであった。

神祇伯白川家における鎮魂祭

山口剛史

宮中における鎮魂祭は、明治の再興に至るまで、十五世紀以降中絶の憂き目を見た、とするのが一般的な認識である。しかし、鎮魂祭は、光格天皇の朝儀復興の一環として、既に寛政九年（一七九七）、神祇伯白川家邸内において「再興」を果たしており、実は「内々沙汰」でそれ以前から「例年」修されていた（『柳原均光日次記』同年十一月十三日条）。

例えば、『伯家部類』には「鎮魂祭略次第」が、また、資氏王著とされる『伯家鎮魂祭行事伝』（國學院大學御所蔵）には「鎮魂祭行式」が収められており、両書には、宝暦三年（一七五三）当時、鎮魂祭が伯家邸内で「御代々」天皇の「依仰、例年」斎行されている旨が記されている。この宝暦三年当時の鎮

NII-Electronic Library Service